

書評 : Ogilvie, S. (Ed.). (2020).
The Cambridge companion to English dictionaries.
Cambridge University Press.

内田 有紀
青山学院大学教育人間科学部

Book Review:
Sarah Ogilvie, S. (Ed.). (2020). *The Cambridge companion to English dictionaries*. Cambridge University Press.

Yuki Uchida
College of Education, Psychology and Human Studies, Aoyama Gakuin University

評者が本書を手取ることとなったきっかけは、講師として学生たちに英語を教えながら、これから電子辞書はどうなっていくのだろう、という素朴な疑問を抱いたことだった。評者は、2007年度以降、日本のいくつかの大学で英語講読や英作文を教えてきて、当初は自分が子供の頃から慣れ親しんできた紙の辞書が学生たちのあいだで猛烈な勢いで電子辞書に取って代わられる様子を驚きを覚えつつ、やがて自分自身も電子辞書を導入し、これは英語ないし外国語を比較的気軽に読み書きすることを促してくれる有用な機器であると思うようになった。特に、和英辞典・類語辞典・活用辞典などを即座に切り換えながら、あるいはそれらを同時に検索して例文を利用することができるのは、専門家にとっても学習者にとっても英作文を書くうえで計り知れない利便性を持っているだろう。しかし、2019年6月24日の『朝日新聞』によると、電子辞書はピークの2007年には280万台を出荷したが、その後、辞書代わりにも使え、オンライン辞書にもアクセスすることができるスマートフォンに押されて減少が続いているという。教師としては学生にインターネットにアクセスせずに辞書を引いてもらいたいという局面はしばしばやってくる。電子辞書はこれからどうなっていくのだろう。

とはいえ、*The Cambridge Companion to English Dictionaries* と題された本書が扱っている問題はもちろんこのようなものだけではないので、本書を概観するところから始めよう。編著者の Sarah Ogilvie は、オーストラリアのクイーンズランド大学で計算機科学と純粋数学を学んだあと、オーストラリア国立大学で言語学に転じ、オックスフォード大学で博士号を取得した言語学者・辞書編集者・計算機学者であり、スタンフォード大学やケンブリッジ大学で教鞭を執り、現在はオックスフォード大学の言語学・文献学・音声学部の上級研

究員となっている。 *Oxford English Dictionary* の編集者を務めたことやシリコン・ヴァレーのアマゾンの研究所に在籍していたこともある。彼女はこの本では総勢 28 名のおもに辞書編集者からなる寄稿者たちをまとめて全 3 部の構成にしている。まず、辞書の形式や内容に関係する基本的ないくつかの論点を概観し、次に、今日へと至る数世紀にわたる英語辞典の発展の歴史を描き、最後に、英語辞典を編纂するうえでの英国と旧植民地や英連邦の相互作用について考える、という試みである。こうして、辞書編集・辞書学の様々な話題について 27 篇もの論考が収められている。評者のように限定的な関心から本書を手にとった人間にとってこれらすべてを読み通すことは簡単な作業ではないだろうが、粘り強く読んでいけば、この分野を初めて学ぶ人にとっても適切な入門書となることを意図しているという Ogilvie の言葉の通り (3), 辞書編集・辞書学をめぐる様々な話題について比較的明快に把握することができるだろう。

第 1 部では、Kory Stamper による第 2 章 “How a Word Gets into an English Dictionary” が単語の採録や定義や見出し語としての位置付け、Judy Pearsall による第 4 章 “Diachronic and Synchronic English Dictionaries” が辞書の通時性と共時性、Edward Finegan による第 5 章 “Description and Prescription” が辞書の記述主義と規範主義といった基本的な論点を扱っているが、冒頭から説明している事情のために評者が特に関心を抱いたのは Rundell et al. による第 3 章 “Technology and English Dictionaries” で、デジタル技術やコーパスの発達に辞書編集にいかにか大きな影響を与えたかということが詳述され、そういった技術とともに生まれた *Random House Dictionary of the English Language* や *Collins COBUILD English Language Dictionary* の画期性についても知ることができる (19-20)。

第 2 部では、評者のように英文学を専攻した人間にとっては Jack Lynch による第 12 章 “Samuel Johnson and the ‘First English Dictionary’” や Ogilvie による第 14 章 “The Oxford English Dictionary” が比較的馴染み深い話題だが、英語教育の実践と絡んだ関心からすると、前述の Hargraves による第 17 章 “Electronic Dictionaries” に加えて、John Considine による第 8 章 “A Dictionary Ecosystem” と Howard Jackson による第 16 章 “English-as-a-Foreign-Language Lexicography” が興味深い。Considine は、20 世紀以降の英語辞書の大きな変化として、CD-ROM を経てのオンライン化と、他の寄稿者もたびたび言及するコーパスと並んで learner's と銘打たれる大人の学習者のための辞書の勃興を挙げている。Jackson は、1930 年代のインドと日本における英語教育と辞書編集が英国にいわば逆輸入される様子を描いていて、H. E. Palmer の *A Grammar of English Words* や A. S. Hornby の *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* が今日の *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* に繋がっていくということを知ることができる。

第 3 部は英国の旧植民地や英連邦の国々から連合王国内のスコットランドの辞書まで扱っていて、英語教育、特に英作文のための紹介としては話題が広がりすぎるので割愛するが、ある種の英語辞書の発展には非英語圏の国々の存在が大きな役割を果たしていたという上述の第 16 章の話と併せて、英語の地域性とグローバル性が絡み合う状況に関心がある学習者は興味深く読むことができるだろう。

本書は基本的に単一言語の英語辞書を扱っているが、私たちのように外国語としての英語を学ぶ者たちにとっても結局のところ基本となるいくつかの辞書の存在と、それらが言葉の実際の使われ方を「記述」しようとするからには絶え間ない変化の過程にありながらも利用者にとっては「規範」にもなるということ、を確認させてくれる。

これから電子辞書はどうなっていくのだろう、という冒頭で説明した評者の疑問にも本書は答えてくれる。正確に言えば、より根本的なところに立ち返って考えるためのヒントを与えてくれる。Orin Hargraves による第 17 章 “Electronic Dictionaries” によると、データがデジタルの形で保存されていて、利用者は画面を見て操作したり情報を得たりして、電流がなければ動かないもの、というのが *electronic dictionary* の特徴である (207)。デジタル技術が辞書との親和性がきわめて高いものであるということは本書の他の寄稿者たちも異口同音に述べているが、デジタル技術を利用した辞書はさらなる技術の発展とともにどんどん形を変えていくものである、評者を含めた日本人が大雑把に「電子辞書」と呼んでいるところのものは *handheld electronic dictionary* ということになるが、これはどうしても本格的なオンラインではないために時代遅れということになる (211)。これはデジタル・メディアの発達と電子機器の小型化により過渡的に登場したものであり、おそらくアジアにおいてもっとも大きな市場を獲得したが、限定的な技術であり、かつてワード・プロセッサや PDA がそうなったように、普及しかけたと思ったらすぐに廃れてしまう可能性があるという Hargraves は見ている。ただし、スマートフォンの使用が許可されていない教室などでは *handheld electronic dictionary* は有効でありつづけているということは彼も認めている。本書の出版後の状況ではあるが、教室における通信機器の利用は、ChatGPT に代表される生成 AI が 2023 年から急速に問題として浮上してきている状況で、それらとの兼ね合いで再考されるべき問題と評者は考える。

さて、本書について評者がやや残念と思う点は、索引が物足りないということである。300 頁を超える本文に対して、18 頁にわたる *Guide to Further Reading* が付けられている一方で、索引は 4 頁しかない。前述の Jackson によるインドと日本における英語教育と辞書編集の節は英語を外国語として学ぶ人たちや辞書編纂に関心を持っている人たちにとって有用な情報となっていると思われるが、検索には “Japan” という項目はなく、“Indian English” はあるもののこの節には対応していない。

また、呆然とせざるをえないのは、本書が 2020 年に出版されたあと、今年 (2023 年) には言葉とインターネットをめぐる状況が大きく変わっているということである。前述のように、2023 年に入って、ChatGPT に代表される生成 AI が教育に与える影響が急速に取り沙汰されるようになってきている。評者のような英語講読・英作文の講師は受講者の提出物の出处についてこれまで考えなくてよかったようなことを考えなければならないということになるが、辞書編集者・辞書学者たちは AI によって生成された言葉を彼らの分野においてどのように見ているのだろうか。本書は辞書に関する包括的な入門書であり、*Cambridge Companion* という改訂の多いシリーズの 1 冊でもあるからには、この問題を扱った章を加えた増補版が待ち望まれるところだろう。